

教職大学院

Newsletter No. 123

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2019.6.21

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2019 Summer Sessions 特集号

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Summer Sessions 2019
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2019 summer sessions

6/21 (fri) 17:30-18:40
22 (sat) 13:00-17:40
23 (sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V (教育系1号館)
/AOSSA (JR福井駅東口)

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2019.6.21-23

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

共催 社会教育実践研究フォーラム
後援 福井県教育委員会・福井観光コンベンションビューロー

内容

ラウンドテーブルによるこそ	(2)
実践し省察するコミュニティ	
実践研究福井 ラウンドテーブル	
全体スケジュール	(3)
Pre-session	(4)
ZoneA 学校	(4)
ZoneB 教師	(5)
ZoneC コミュニティ	(6)
ZoneD 授業研究	(7)
省察的実践学会 準備会	(8)
Round Table Cross Sessions	(10)
Students' Poster Session & Forum	(11)
実践し省察するコミュニティを結び支える	(12)
ラウンドテーブルの歩み	(14)
ラウンドテーブルの広がり と 深化	(16)
アーカイブ	(17)
基金のお知らせ	(24)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2019年6月の開催をもって37回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。初日のプレセッション、学校 (Zone A)・教師 (Zone B)・コミュニティ (Zone C)・授業研究 (Zone D) の各領域に分かれた2日目の各ゾーンのセッションを経て、最終日はクロスセッションでの語り合い・聴き合いを行います。この3日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

互いに、長く曲折に満ちた実践の歩みを聴き合い、支え合うために

ラウンドテーブルという企図

福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科長
柳澤昌一

昨年12月、附属義務教育学校のプロジェクト学習の展開をめぐる一冊の本が刊行されました(『福井発プロジェクト型学習』東洋館出版社, 2018.12)。その中心は、「テレビ」をテーマとして3年間にわたって学年の120名の生徒たちが取り組んだ長期協働プロジェクト・学年プロジェクトの記録です。中学に進んで新しいメンバーと3年間にわたり学年全員で取り組んでいくテーマを設定するだけでも、多大な調整力を要する困難なプロジェクトになります。クラスで、また全体で提案と議論を重ね、テーマを設定していくプロセスに2ヶ月近くがかかっています。調査を重ね、番組(「附っテレ」)作成を試行錯誤して進めていきますが、当然のことながら初発の番組は見る者を引きつけるにはほど遠く、番組を中心とした文化祭での発表の場の運営も経験不足・準備不足を露呈することになります。2回・3回と取り組みを重ね、課題を巡る調査・学習と試行錯誤を重ねていくことを通して、番組の質も、そして協働のプロジェクトをマネジメントする力も、経験と学習の積み重ねを反映して次第に培われていくことになります。

1年目の春に、この長いプロジェクトの立ち上げの段階、そこでのテーマ設定をめぐる話し合いの場面にいきなり接したならば、おそらく2ヶ月もかけてそれを行う意味を理解することは難しいかもしれません。秋から冬にかけての初発の番組や発表に接したとしても。

一方、3年に近づいた時期、自分たちで多様なプロジェクトを編み、調整していく生徒たちに接し、しかもそのプロジェクトの意味、経験の価値を語る姿に接したならば、どうしてこの生徒たちにそうした自治的な活動や表現の力が培われてきているのか、不思議な感覚を覚えることになります。長いプロセスの断片を切り取り評価する枠組みとらわれる限り、私たちは求めるべき力が培われていく長く曲折に満ちた実践の歩みを捉えることは出来ません。たとえその渦中にありその展開を経験し実感していたとしても、その長い過程、複雑で局面や重要な筋道をとらえ返すことは難しいに違いないのです。長い展開を跡づけ直し、その曲折の意味を探り、展開につながる要因を検証し、次の、そして自他の実践の展開につながる重要な手がかりを見定める。そうした問い直し、長い展開をめぐる省察のサイクルを自覚的に組織していくことなしには、長い実践と学習のプロセスとその意味を捉える営みは始まりません。

長い実践のプロセスをたどり直し、その筋道を探り意味を問い直す。記録に基づき、長い実践の展開を60分から100分をかけてじっくり聴き合うラウンドテーブルのセッションは、そうした省察のサイクルを自覚的に、協働して組織していくための、それ自身が一つの小さなプロジェクトとして出発しました。そのときの呼びかけ文には、次のように記されています。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る (2001.10)

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたくと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたくと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所にな

2001年の小さな出発から20年近くを経て、毎年2回ずつ重ねられてきたこのラウンドテーブル。規模が大きくなり、多様な分野・多様な国々からの参加を得るようになって、目指していることは変わりません。これまでの自分自身の実践把握の枠組みから歩み出して、より長い、そして多様な人々の実践の展開を追い、探究する。実践への誠実さが、性急な問いと答えへの求めに傾きがちになることを互いに戒めながら、短い枠組みでは堂々巡りに見える営みをたどり直し、長い多重の螺旋の展開として捉え返していく。そうした協働探究の3日間にして行けたらと思います。どうかよろしく願いいたします。

実践研究

福井ラウンドテーブル

2019 summer sessions

6/21 (fri)

Pre-session 17:30-18:40

専門職学習コミュニティを培う
ラウンドテーブルの意味とデザイン

6/22 (sat) 13:00-17:40

Students' Poster Session 13:10-14:10 子どもたちが語る「私たちの学校・学び・未来」
Students' Forum 14:20-15:30 僕たちがつくる学びのカタチ ～なぜ学ぶ? どう学ぶ?～

Orientation 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校:21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
ー協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出すー
- B 教師:21世紀の教師教育をイノベーションするー実践的教育力を支える教師教育改革
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする
ー地域と学校のつながりを編み直すー
- D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

Session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

Session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る symposiums

Session III 16:00-17:40 テーマ別話し合い 問いを深める forums

18:00-18:40 省察的実践学会準備会

6/23 (sun) 8:20-14:00

Session IV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

●6/23のSession IVの参加についてのお願い＝午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

6/21 (fri) 17:30-18:40 会場：教育系1号館 6階コラボレーションホール

Pre-session 専門職学習コミュニティを培う

ラウンドテーブルの意味とデザイン

6/22 (sat) 13:00-17:40

学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

Zone A 学校

21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

－協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出す－

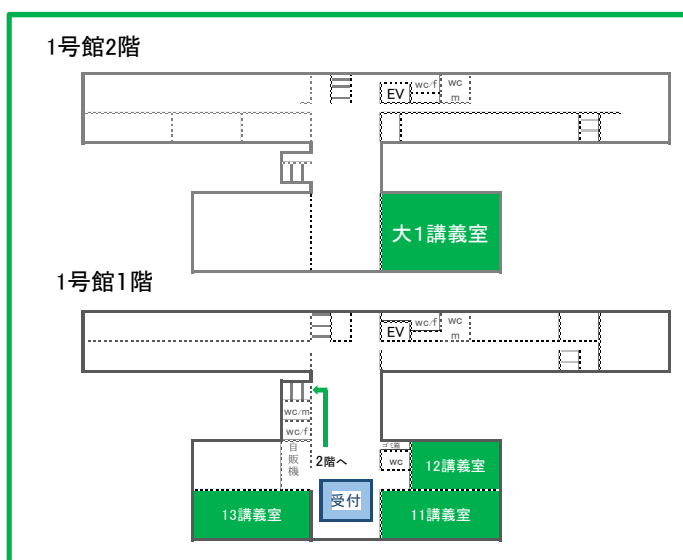
会場：教育系1号館2階 大1講義室 / 1階 11・12・13講義室、2階 大1講義室

これまでZone Aでは、「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと、学

校が持続発展していくための教師協働の在り方について議論を積み重ねてきました。今回の実践研究福井ラウンドテーブル2019 Summer Sessions

では、「専門職の学び合うコミュニティ

(Professional Learning Communities)」のビジョンに基づき、「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」という新しくもあり核心的なテーマを設定しています。学校が21世紀型の学びとして注目されている協働探究型のプロジェクト学習を子どもたちと共に推進しながら、いかにして教師同士、そして教師と子どもたちの学び合う文化を創造することができるのか、この道しるべを参加者のみなさまと協働探究していきます。



Orientation 13:00-13:10 ガイダンス <教育系1号館2階 大1講義室>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア) <教育系1号館 1・2階 フロア>
福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <教育系1号館2階 大1講義室>
21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

<シンポジスト> 福井大学附属義務教育学校前期課程・教諭(研究主任) 五十嵐 洋行 氏
福井県立若狭高校・教諭 小坂 康之 氏

<ディスカサント> 大谷大学文学部・教授/福井大学連合教職大学院・客員教授 荒瀬 克己 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <教育系1号館1階 11・12・13講義室、2階 大1講義室>

※ 小グループで、Session II シンポジウムの内容に関連した話し合いや実践報告を行います。

Zone B 教師

21世紀の教師教育をイノベーションする

－実践的教育力を支える教師教育改革－

会場：教育系1号館6階 コラボレーションホール

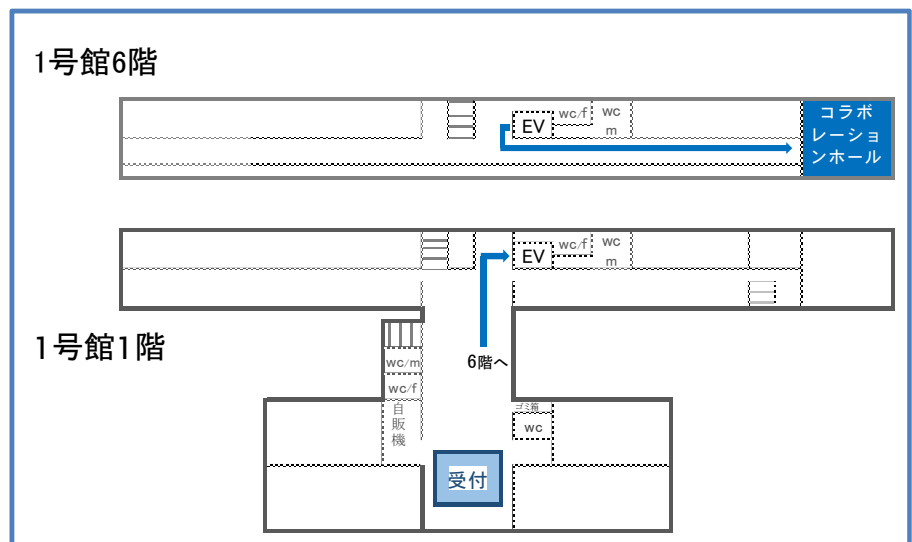
Zone B では、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、「21世紀の教師教育をイノベーションする」をテーマとしています。

このテーマの下で、昨年度までは Zone B を Zone B1 と Zone B2 とに分け、Zone B1 では、中教審答申 (H27) や国立教員養成大学・学部・大学院・附属学校の改革に関する有識者会議報告 (H29) などを踏まえ、自治体と教職大学院とが連携した体系的な教員養成や研修のあり方などについて探ってきました。また、Zone B2 では、学部や大学院で教員養成に携わる教員、学部生や大学院生のほか、現職の先生方も交え、互いの取り組みを語り合い聴き合うことなどを通して、学部・大学院を通じたこれからの教員養成について探ってきました。

そうした中で、昨年 (H30) には、中教審答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」がまとめられました。大学は、多様で柔軟な教育研究体制を構築し、学びの質を保証していくことなどを通じて、学修者本位の教育へと転換していくことが求められています。教職大学院もまた、現職教員のいっそう積極的な受け入れ、実務家を含む多様な教員の登用とそうした教員による教育研究活動の強化、学びの質を保証するカリキュラム・マネジメントの確立、大学の「強み」や「特色」の明確化と強化、地域への貢献などを進めていくことが求められることでしょう。

そこで今回は、Zone B1 と Zone B2 とを統合し、大学、小・中・高等学校、行政等の多様な参加者を得て、こうした高等教育のあり方を長期的に展望しつつ、改めて教師の実践的教育力を育て支えていく教師教育のあり方を探ることとしました。とりわけ、教師を志す学生 (大学院生、学部生) の実践的教育力を育成するため、長期インターンシップを含めた実習のあり方やその充実に向けた方策について、また、そうした実践的教育力育成の核となる実務家教員を含む教職大学院教員に求められる資質・能力とその育成方策とを手掛かりとして考えていきます。

子どもたちが「主体的、対話的で深い学び」を進めていくためには、教師も、さらには教師教育を担う教職大学院教員も、学ぶことを愉しみ学び続ける人でなければなりません。それぞれの取り組みや思い、あるいは課題や悩みなども含めて共有し、学び合いながら、これからの教師教育の進むべき方向と具体的な方策とを探っていきたいと思えます。多くの皆様のご参加をお待ちしています。



Orientation	13:00-13:10	ガイダンス	<教育系1号館6階 コラボレーションホール>
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション(ナレッジフェア)	<教育系1号館 1・2階フロア>
Session II	14:20-15:50	シンポジウム	<教育系1号館6階 コラボレーションホール>
		(シンポジスト)	
		山口大学教育学部・教授	和泉 研二 氏
		やまぐち総合教育支援センター・次長	辻岡 博之 氏
		福井県教育総合研究所教職研修センター教員研修課・課長	森田 史生 氏
		福井大学連合教職大学院・教授	三田村 彰 氏

〈コメンテーター〉 文部科学省総合教育政策局教育人材政策課・課長

柳澤 好治 氏

〈コーディネーター〉 福井大学理事・副学長

松木 健一 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム

＜教育系1号館6階 コラボレーションホール＞

※ 小グループで、シンポジウムの内容に関連した協議を行います。

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする

ー地域と学校のつながりを編み直すー

会場：AOSSA (JR 福井駅東口)

これまで Zone C では、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」という大きなテーマのもと、そうした展開を支える広報や記録、コミュニティを支える実践者の力量形成といったサブテーマで多角的に検討してきました。今回は、地域のコミュニティにおける学校にも焦点を当て、「地域とともにある学校」についても考えていきたいと思っております。少子化や情報化といった社会の変化のなかで、これまでの地域コミュニティの在り方にも変容が生じており、改めて今「社会に開かれた教育課程」や「学校と地域の連携」といったことが教育改革でも重要課題になっています。豊かな地域コミュニティを醸成するために、地域や学校における実践者の方がどのようにそのつながりを編み直しているのか、それぞれの立場からの実践報告を共有するなかで一緒に考えていきたいと思っております。



* 6月22日、Zone C の会場は福井駅東口の AOSSA になります。

翌 23 日の実践研究福井ラウンドテーブルの会場は福井大学文京キャンパスです。ご注意ください。

Orientation 13:00-13:10 ガイダンス <AOSSA>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア) <AOSSA>

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <AOSSA>

〈シンポジスト〉 福井市清明公民館・主事 金木 美東里 氏

福井市六条小学校・教諭 寺前 公恵 氏

〈コーディネーター〉 福井大学連合教職大学院・特命助教 矢内 琴江 氏

福井大学連合教職大学院・非常勤講師 水野 幸郎 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <AOSSA>

※ Session II での課題の提起を踏まえ、5~6人の小グループとなり実践を交流します。

特別企画ー看護教育シンポジウムー 2019年6月22日(土) 10:00-12:00 <AOSSA>

「看護教育における学生の学びをいかに支援するかー看護学教育と教育学教育の質保証を視野に入れてー」

提案① 森 透 氏 (福井医療大学) 「本企画の趣旨説明 1」

提案② 前川 幸子 氏 (甲南女子大学) 「教員のリフレクションを生かした学び合う関係の構築」

提案③ 大口 二美 氏 (福井医療大学) 「看護学教育におけるカリキュラム改正への取り組みー福井医療大学の場合ー」

提案④ 肥田 武 氏 (一宮研伸大学)・三品 陽平 氏 (愛知県立芸術大学)

『「チーム学校」の実現をめざすアクションリサーチー学校教育版 IPE/TPE の試みー (第2報)』

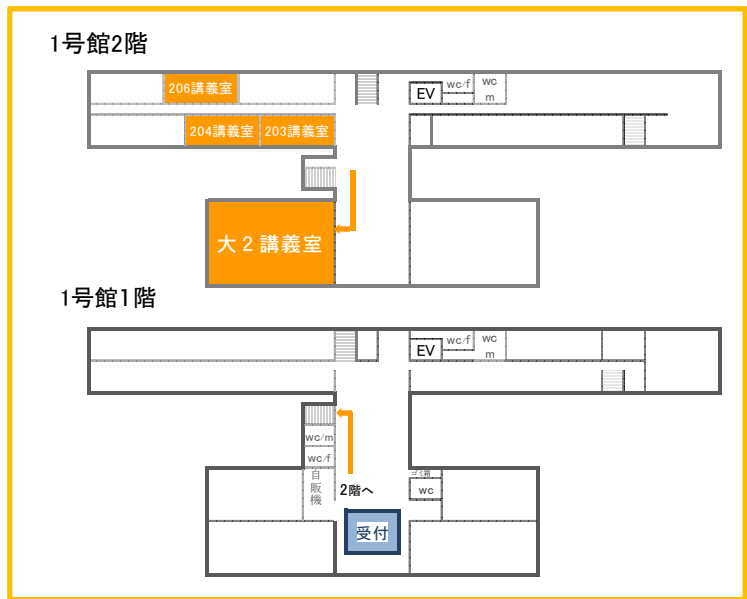
※ 話題提起の後、グループ討論を行います。

Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

会場：教育系1号館2階 大2講義室 / 2階203・204・206講義室

いま、子どもたちが真に探究していく学習を実現するには、公開授業・公開保育をやっておしまいという1サイクルの授業研究・保育研究に留まらず、持続的に協働で探究していく授業研究・保育研究の文化が必要といえます。ZoneDではこれまでそうした授業研究・保育研究をいかに組織するかを考えてきました。木村優・岸野麻衣編著「ワードマップ 授業研究：実践を変え、理論を刷新する」(新曜社、2019年)においては、このような授業研究の在り方を4つのモードとして提起しています。モード1では、チェックリストに基づいて授業者の技術や知識を評定し、授業研究会で観覧者が批評や助言を行うことが主となります。モード2は、授業実施前の段階を特に重視して指導案の検討を繰り返し、研究授業の計画を厳密に実施し検証していきます。モード3では、子どもの学びの見取りと同僚間のダイアログを核にすえ、実践中と実践後における授業者を含めた参加者全員の省察を重視します。モード4では、モード3に時間軸を組み込み、子どもの長い探究のプロセスを教師が協働探究し続けていきます。特にモード4では、1時間の授業を見合い語り合うことに留まらず、その後の子どもの探究の展望を協働で検討し、単元全体を再構成していきながら、授業を終えた後には実践記録を綴り、子どもたちの学習過程とそれを支える授業デザインを捉え直していきます。



- Orientation** 13:00-13:10 オリエンテーション <教育系1号館2階 大2講義室>
- Session I** 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレヅフェア) <教育系1号館 1・2階フロア>
福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校
- Session II** 14:20-15:50 シンポジウム <教育系1号館2階 大2講義室>

「授業研究・保育研究のモード(様式)をくりあげる」

- <シンポジスト> 福井大学教育学部附属義務教育学校・教諭 菜畑 未来 氏
奈良女子大学附属小学校・主幹教諭 阪本 一英 氏
福井市進明中学校・教頭 大橋 巖 氏
- <コーディネーター> 福井大学連合教職大学院・准教授 岸野 麻衣 氏

- Session III** 16:00-17:40 フォーラム <教育系1号館2階 203・204・206講義室>

※ 実践紹介の後、小グループで話し合い深め合います。

「多様な授業研究・保育研究から学び合う」

- A. 「保幼小の実践に学び合う」 福井大学教育学部附属幼稚園・教諭 上田 晴之 氏
鯖江市立豊小学校・教諭 森崎 岳洋 氏
- B. 「中高の実践に学び合う」 東京都板橋区立赤塚第一中学校・副校長 岡部 誠 氏
マラウイ国 Loyola Jesuit 中等学校・教諭 Austine Ganizani Moyo 氏
- C. 「特別支援教育の実践に学び合う」 福井県立奥越特別支援学校・教諭 廣嶋 きよえ 氏

18:00-18:40

会場： 教育系1号館6階 コラボレーションホール

省察的実践学会 準備会

個々のコミュニティ・分野・領域を超え、実践の知を通わせ、結んでいく。そのための新しい実践研究の交流の場を拓く。そうした新しいコミュニケーションの場を目指して、2016年6月に〈省察的実践学会〉の呼びかけをはじめ、以来、多くの方に賛同いただき、さまざまなコミュニティ・分野・領域から発起人・会員が集まりつつあります。これまでのラウンドテーブルにおいて準備会を行い、学会の趣旨を共有してきました。今回、省察的実践学会「省察的実践記録集成」No.1について意見交換するセッションを持ちたいと思います。

省察的実践学会『省察的実践記録集成』No.1

記録の投稿募集

省察的実践学会『省察的実践記録集成』編集委員会

これまで、福井大学でのラウンドテーブル開催の際に、省察的実践学会設立に向けての準備会を重ねてまいりました。参加者の皆さんから、省察的実践学会の活動や紀要のあり方などについてもご意見をいただいております。そこで、改めて実践記録を軸とした学会づくりの基礎を固め、省察的実践研究を発展させていくために、『省察的実践記録集成』を編みたいと考えています。

これは、省察的実践を志向するさまざまな分野における実践の省察的記録、および省察的研究を幅広く収集・集積し、省察的実践・省察的実践研究への多様な企図の持続的な交流と相互検討の基盤を築くことを目的としています。さらに、実践者自身が記録を公表するという公的責任を果たす場を構築することも目指しています。この『省察的実践記録集成』に、記録・研究が掲載された後に、さらに発展させたものを、学会紀要『省察的実践研究』に投稿することが出来ます。

『省察的実践記録集成』に投稿していただくにあたり、実践研究福井ラウンドテーブル（2月・6月）などでの実践報告と相互検討を経ていただきます。ラウンドテーブルで実践を語っていただいた後に、実践記録を記すことは、改めてそこで自分自身が語った言葉を吟味したり、聴き手の皆さんの発言を思い起こしながら再度自分の実践をふり返るといふ、自分の実践の省察を一層深めていく契機となります。それらの吟味を経た実践記録が掲載された『省察的実践記録集成』は、読み手にとっても、多様な実践記録を自分の実践に照らしながら読むことで、実践のさらなる展開を展望することが期待できます。このように、『省察的実践記録集成』を、書き手にとっても読み手にとっても、互いの実践から学び合う場にしていきたいと考えています。

つきましては、『省察的実践記録集成』No.1への実践記録の投稿を予定される方は、ラウンドテーブルへの参加申し込みの際に、以下の要領で投稿エントリーをお願い致します。なお、ラウンドテーブルでは、実践記録の執筆を支える場となるようグループのつくり方を工夫します。

皆様のご応募をお待ちしております。

問い合わせ先：

省察的実践学会『省察的実践記録集成』編集委員会

E-mail: reflective.practice2016@gmail.com

◆実践記録投稿エントリーの要領◆

実践記録の投稿を希望される方は、以下の3点についてご了解いただいた上で、2019年6月19日(水)までに、下記の通りお申し込みください。

- ①2019年6月22日(土)18時～ 開催予定の「省察的実践学会」準備会にご出席ください。
- ②2019年6月23日(日)のクロス・セッションで実践を報告してください。
- ③ご自身の実践に関わる人々に、実践を公表することの意義が共有されていること。あるいは、すでにご自身の実践が組織内の刊行物で公表されていること。

もし、刊行物等が組織内にない、あるいは公表予定だが未発表の場合には、クロスセッションでの報告、さらに実践記録の中に、組織内で共有されている記録を公表することへの意義、さらにその共有プロセスについて報告すること。

1) エントリー提出方法

以下のアドレスまで下記の内容についてご記入の上、ご連絡ください。

- ・アドレス: reflective.practice2016@gmail.com
- ・件名に「省察的実践記録集成」への寄稿について(所属・お名前)とご記入ください。

2) 記入内容

- ①氏名・所属
- ②連絡先(e-mailアドレス)
- ②記録の表題
- ③予定ページ数

◆今後のスケジュール◆

第1回

2019年6月23日 実践研究福井ラウンドテーブル クロス・セッションでの報告

2019年8月31日 原稿提出

2019年12月 『省察的実践記録集成』No.1 学会ホームページにて公開予定

第2回

2020年2月16日 実践研究福井ラウンドテーブル クロス・セッションでの報告

2020年4月30日 原稿提出

2020年8月 『省察的実践記録集成』No.2 学会ホームページにて公開予定

今後、予定の変更等がありましたら、ホームページでお知らせ致します。

*選考等について

基本的に多くの分野における実践記録・実践研究への企図を促し共有することを目的とするため、本学会の趣旨である省察的実践への企図をめざす限り、多くの記録・研究を集成することを優先する。

◆記録投稿要領◆

1) 提出方法

ホームページに掲載されているフォーマットにしたがって原稿を作成し以下にご送付ください。

2) 提出期限

2019年8月31日

3) 提出先

reflective.practice2016@gmail.com

6/23 (sun) 8:20-14:00

Session IV 実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

8:20 1号館1階ロビーで受付をお願いいたします。参加するグループを確認してください。（グループは、多様なメンバーが交流できるよう、運営委員会で設定いたします。）

- | | |
|--------|-------------|
| ① はじめに | 8:30-8:40 |
| ② 自己紹介 | 8:40-9:00 |
| ③ 報告Ⅰ | 9:00-10:40 |
| ④ 報告Ⅱ | 10:40-11:40 |
| ⑤ 報告Ⅲ | 12:20-14:00 |

ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていきただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。

グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。

報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。

Students' Poster Session & Students' Forum

これから、21世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生が今、この時の教育の中で何を学び、いかに学び、そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを、「私たちの学校・学び・未来」というテーマで子どもたち自身の言葉で表現していただきます。

6月22日(土) 13:10-15:30

会場：教育系1号館 1・2階フロア / 2階 201講義室

子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来へのイノベーションⅡ』

実践研究福井ラウンドテーブル 2019 Summer Sessions、6月22日(土) Students' Poster Session & Students' Forum「子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来へのイノベーションⅡ』」のご案内です。これから、21世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生・高校生が今、この時の教育の中で何を学び、いかに学び、そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを、「私たちの学校・学び・未来」というテーマで子どもたち自身の言葉で表現していただきます。

Students' Poster Session 13:10-14:10

<教育系1号館 1・2階フロア>

子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来』

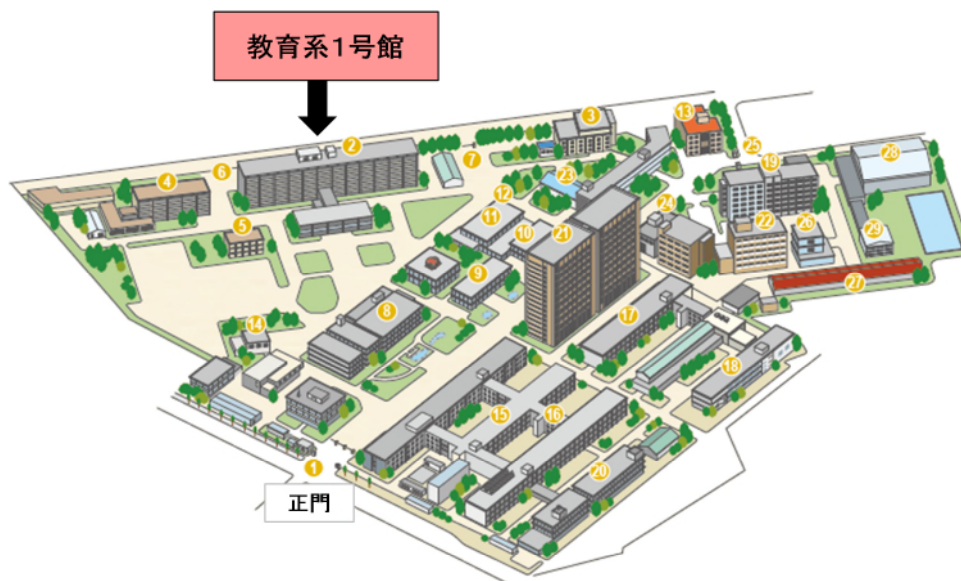
学び de 交流 タイム

14:20-15:30

<教育系1号館 2階 201講義室>

「僕たちがつくる学びのカタチ ～なぜ学ぶ? どう学ぶ?～」

※小グループでのディスカッションの後、全体でディスカッションする予定です。



ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を迫走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かせるような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々の課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうし

た暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

(柳澤 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11、2009.3.31)

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning
Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2019.2

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる20人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働（第1回）
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者20数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第2回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む）（第3回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第4回）
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第5回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第6回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル2004（第7回）
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2005（第8回 参加者100名超）
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル2005（第9回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006 フェニックス・プラザ（第10回）
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル2006（第11回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007（第12回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル2007（第13回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008（第14回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル2008（第15回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009（第16回）稲垣忠彦
- 2009.6.27.28 実践研究福井ラウンドテーブル2009（第17回）5つの領域：専門職として学び合うコミュニティ
（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2010（第18回参加者300名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル2010（第19回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011（第20回 参加者300名を超える）門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル2011（第21回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル2012 spring sessions（第22回）（名称を変更する）

- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions (第 23 回) 参加者 450 名を超える
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第 24 回) 教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions (第 25 回)
11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013 winter sessions (明治大学)
2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム (宇都宮大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回) 参加者 550 名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions (第 27 回)
11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第 28 回) 参加者 700 名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第 29 回)
11.21 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、
2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions (第 30 回) 参加者 800 名を超える
生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions (第 31 回) 参加者総数 547 名
7.8 記念講演&シンポジウム (和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)
11.12 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2017.2.17-19 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions (第 32 回) 参加者 800 名を超える
特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催. 省察実践学会の発足
- 2017.6.23-25 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions (第 33 回) 参加者総数 566 名
10.14 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園)、 10.15-21 マラウイラウンドテーブル
11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学
12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2018.2.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions (第 34 回) 参加者総数 627 名
- 2018.6.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions (第 35 回) 参加者総数 476 名
10.20 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園)、 10.23 マラウイラウンドテーブル
11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良
12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学
12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル (東京学芸大学)
2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
- 2019.2.15-17 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions (第 36 回) 参加者総数 930 名

分散型コミュニティへの挑戦

ラウンドテーブルの広がり と 深化



2001年3月、約20名の実践者や研究者が集まり、「教師の実践的力量形成をめざして」というテーマのもとで互いの教育実践と教育実践研究を交流し合う研究会が催された。ここで放たれた熱き議論が「実践研究福井ラウンドテーブル」の産声である。それから14年間もの間、「実践研究福井ラウンドテーブル」は福井県内外と国内外のコミュニティとの往還を絶え間なく積み重ねながら、21世紀の教育を支援するための実践コミュニティを真摯に耕し続けてきた。このたゆまぬ挑戦と努力の成果として、会を重ねるごとに「実践研究福井ラウンドテーブル」への参会者の増加が挙げられるとともに、参会者による実践報告の内容や質の多様化が挙げられる。「実践研究福井ラウンドテーブル」の創世記には少数の実践者の報告のみだったが、現在では研究者も自らの「実践」を報告し、さらに地域コミュニティの人々も自らの取組とその実践的意味を探究するために実践報告を行うようになった。この間、国際的な教育研究の前進を足がかりとしながら、教育の質保証と学びの転換を目指す多種多様な教育改革の施策や取組がなされてきた。その全ては、21世紀の知識社会に生きる子どもたちの幸せを保証するための挑戦であり、子どもたちの成長を支える全ての教育関係者の実践を支えるための挑戦である。「実践研究福井ラウンドテーブル」はこれらの挑戦を促し支えるための省察的機構としての実践コミュニティである。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの文字通り「実践の省察」を促し支えることをビジョンとする。このビジョンを基盤とした「実践研究福井ラウンドテーブル」には、日本全国や世界各地から多数の実践者や研究者が集まる。当然、彼ら／彼女らは「実践研究福井ラウンドテーブル」とは異なるコミュニティ、あるいは複数のコミュニティに属しており、それぞれのコミュニティ内でイノベーションを生み出す実践に挑戦している。つまり、「実践研究福井ラウンドテーブル」はローカル・コミュニティが集合する大きな、コミュニティの「坩堝(るつぼ)」なのである。もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティが有機的に結びつき、そこでコミュニティ間の

相互作用が加速化すると何か起きるのだろうか。それはおそらく新たな「知」の創発であり、新たな「かかわり」の生成であろう。これら新たな「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、現代社会を取り巻く困難や格差を突破するためのいくつかの「解(ソリューション)」が生み出される可能性が高まる。ただし、このダイナミクスを大きくし、このダイナミクスの質を深化させるためには「戦略」が必要になる。ただ指をくわえて待っているだけではダイナミクスやイノベーションは起こらないのである。

福井大学教職大学院はこれまでの「実践研究福井ラウンドテーブル」結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携し、「分散型コミュニティ」の設計に着手し始めた。日本全国そして世界各地にあるコミュニティの相互作用と化学反応を生み出すためには、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことが可能な「分散型コミュニティ」を設計することが肝要である。複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そこで互いの課題や問題を同定し、それらの解決策を考察し、共有可能な「知」を蓄積することが可能になる。「分散型コミュニティ」への挑戦とはつまり、「グローバル・コミュニティ」を築くための挑戦なのである。

2014年度には福井大学教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島で共有された理念とビジョンに基づく「ラウンドテーブル」が開かれた。この「ラウンドテーブル」の広がり と 各地で放たれた息吹は、日本の教育実践を支える新たな「省察的機構としての実践コミュニティ」の産声である。そしてこの実践コミュニティの足音はすでに様々な地域で共振している。この実践コミュニティは、おそらく日本の教育界ではじめて戦略的に組織化された「分散型コミュニティ」であり、今後数年あるいは十数年で「グローバル・コミュニティ」へと深化・進化することだろう。

(木村 優『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書 ラウンドテーブルの広がり と 深化』2015.3.31)

Archive

—アーカイブ—

ラウンドテーブル 2015 Summer Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.76 (15.08.17) からご紹介いたします。

Newsletter No.76 (15.08.17) より

ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース 2年 吉田 智保

福井大学教職大学院の門を叩いてから3度目のラウンドテーブルを迎えた。多くの先生方との出会いがあり、その中で実践の共有や新たな発見ができるこのラウンドテーブルは、今や私の中で一大イベントとなっている。そんな一大イベントを控えた金曜日、2日目の報告で用いるストレートマスター2年の実践報告書が刷り上がった。私たちは嬉々とした表情でそれを受け取った。そしてその実践報告書を片手に、ラウンドテーブルへの期待を膨らませながら会場の事前準備にも一層力が入ったのを鮮明に覚えている。

この2日間、私は「若手として〇〇」ということを自分の中の核としてラウンドテーブルに臨んだ。というのも、今年度に入り若手の育成に励んでいるリーダーの先生方のお話を伺う機会が多いということ、また実際に現場においても若手の教員が多い現状から、避けては通れない課題であると考えたからである。今回は特に上記のことを実感したグループ討議について取り上げたい。

まず1日目のSessionⅢにおいて、「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」を軸に語り合いが始まっていった。メンバーは県内の先生方で構成されていたが、異校種であったため校種を越えた多様な意見が飛び交う。校内の組織づくりや研究会についての話から、話題は若手の育成へと移った。その中で嶺南の高校からご参加されている先生は、ある課題を抱えていた。それは、組織づくりの中での若手の育成は避けては通れないということである。その背景に、校内の教員層を年代別に見ると、中堅の層がなく若手の占める割合が大きいという現状があるからだとおっしゃっていた。この課題をもとに、グループの先生方の実践の語りが繰り返された。メンタリング制度を導入し日々の小さな悩みから授業力の向上まで、若手教員を支えていく組織をつくり上げているという先生や、学校の枠を超えた若手

育成の場づくりに積極的に取り組んでいる先生もいっしょだった。その取り組みの中で共通していたのは、若い世代が必死にもがく姿に何とか力になれないかということ、また同時に福井のこれからの教育のためにも自分たちが出来ることを残していけないかという思いであった。

しかし、それと対照的に若い世代への問題を指摘する場面も見受けられた。ある先生は、失敗したくないという思いに引きずられ、挑戦心や協働性に欠ける若手も目の当たりにしたという。その原因のひとつには、同僚・上司への目がある。つまり頑張っているように見られたい、力のない奴だと思われたくないという気持ちのことである。結果、一人で抱え、弱さを見せたくないがために窒息してしまう。だが、福井県では自分の弱みを開いてもそれを受け入れ、支えてくれる多くの先生方がいらっしゃる。また、若い世代が心置きなく挑戦出来る環境にある。私はこの日これらを強く実感することができた。そして同時に、若手を献身的にサポートしてくれる先生方の思いに心動かされ、全力で自己の学びの向上のために挑戦し失敗から学ぶ、そんな教師になりたいと思いを強めた機会となった。

そして2日目。昨日とは打って変わってグループのメンバーは県外の先生方が大半であり、またその半数が私と同世代の若手であった。この実践報告終了後、私は何とも言えない達成感とやる気に満ち溢れていた。なぜなら、壁にぶつかりながらも試行錯誤し、現状を何とか変えたいという確固たる意志を持っている実践者の思いに触れることが出来たからである。加えて、その実践者の課題に対しメンバーもひとつになりながら、クロスセッションを行うことで多くの新しいヒントが生まれたことも挙げられる。図書館教育に関する実践報告においては、学習くつろぎ空間として活字離れが進む生徒をどのように図書館に寄り付かせるかという課題を共有した。

その際、校内の教師の推薦書のコーナーを開設するという意見や、また花を飾るなどの小さな工夫であるが場の雰囲気を変えるとといった意見など多くの考えが飛び交った。また NIE 教育に関しても、新聞を必ずしも「読む」という切り口から入るのではなく、新聞からクイズを作成するなどの「遊ぶ」という切り口から入ることも可能だという考えもあった。目的があると子どもは一生懸命読もうとする。自由な読み方が、自分で情報を取捨選択する能力の育成に繋がるのだと根拠をもって私自身も考えさせられた。

とても実りのあるラウンドテーブルであった。「来てよかった。今日の意見、自分の県に、学校に持って帰ります。」そうおっしゃっていたグループの先生の清々しい表情が今でも思い出される。若い世代として必死に努力している先生や学生、それを支えている多くの先生方を目の当たりにし、自分に更にエンジンをかける機会となった。これらを新たな明日からの活力とし、精進していきたい。

ラウンドテーブルに参加して

スクールリーダー養成コース 1年／福井市足羽中学校 神部 浩平

新しい世界に触れること、自分の歩みを見直すこと。ラウンドテーブルに参加して、私が感じたことを要約するとこの2つになると思う。多くの人と交流しながら、『自分はどうだったのか…』と考え、発言することが求められた2日間だった。慣れない活動の連続で疲れ果てたが、気がつくと終わってしまったような充実感があった。はじめてのラウンドテーブルを衝撃的に、そして有意義に過ごすことができた。

土曜日のポスターセッションでは、まず教育研究所の研修システムについて話を聞いた。私は長野県からの派遣教員として福井に来たばかりであり、福井教育の良さを探りたいという願いがあった。この3ヶ月間、福井の先生たちに混じって働く中で、充実した職員研修に興味を持つようになった。そんな私にうってつけのポスターセッションだった。説明を聞きながら質問できる機会は大いに参考になった。後半はレジャ＝エミリアの幼児教育について話を聞いた。中学校とは分野が異なるが、幼児教育の狙いに共感できる部分が多かった。レジャ＝エミリアでは、教育サポートのために地域や企業が協力するシステムができあがっているという。振り返って、自分自身はどのような考えを持っていたかと言えば、地域と協力しようという意識は希薄だった。また、企業に教育の一環を担ってもらおうと考えたことは無かっただろう。優秀な若い人材が必要なのは地域・企業であり、教育へと力を貸してもらえ可能性は大きいのだと気づかされた。土曜日、日曜日で何度も感じたことだが、自分の知識は狭く、新しい世界は大きく広がっていることを痛感した。見聞きすればするほど、この先に活かしたい発見をするこ

とができた。レジャ＝エミリアの幼児教育も、それを感じさせてくれたものの1つである。

私が参加した「Zone D 授業」では、実践発表を聞き、グループセッションを行った。うしく小学校も附属中学校も、どちらもアクティブラーニングを目指す興味深い実践発表だった。それと同時に、発表を受けてグループでセッションを行い、1人では考えつかないような新しい発見をすることもできた。セッションの主なテーマはアクティブラーニングの実践についてだったが、話し合う中でいくつかの疑問が出てきた。例えば、「グループ学習」とよく言われるが、今求められているのは、「チーム」として課題を解決する力ではないかという話題が出た。グループ学習では得てして役割を決めて活動することが多い。その一方で、チームで取り組むときには、お互いに意見を出しながら解決策を探っていくものになる。自分自身も発表の準備をさせるためにグループ活動をしていた場面もあり、大きく反省した。会の最後にはディープ＝アクティブラーニングを実現するためにあるべき教師の姿…という疑問が話し合われた。話題は尽きなかった。次回のラウンドテーブルで更に深まった話し合いができることを今から期待している。

2日間で一番刺激を受けたのが日曜日のラウンドテーブルだった。大学生から教育研究所の研究員の方まで、また6人中3人が福井県外からというグループだった。発表も、先進的な総合の実践、大学で行う探究活動、福井県の高校教育の変革、と多種に及び、そのすべてがとても興味深い内容だった。総合的な学習は自分の苦手分野でもあり、質の高い実践を教えて頂き大変参考になった。特に、先生が生徒たちの失敗を恐れず、ときには失敗から気がつか

せようというスタンスを貫いて指導をされていたことに感動した。生徒を目の前にすると、すぐに注意をしてしまう自分に欠けた部分だと感じた。総合から得た経験を活かす生徒たちの姿を聞き、自分も総合的な学習をもっと取り組んでみたいという想いになった。それに加えて大学生の実践のレベルの高さを聞いたり、福井県の数学教育がどう変化しようと

しているのかを聞いたり、盛りだくさんで充実した時間を過ごすことができた。

多くの刺激をラウンドテーブルで受けた。新しいものに出会えただけでなく、自ら実践したいと思う原動力も得た。ラウンドテーブルを「なるほど」で終わらせず、新しい一歩を踏み出す機会にするべく、今後のカンファレンスも頑張ろう…と決意を新たにしている。

ラウンドテーブルに参加して

スクールリーダー養成コース 1年/坂井市高椋小学校 名倉 康浩

「つながる」、話がつながる、思っていることがつながる。そう感じたのは、初めてラウンドテーブルに参加した2月、教職大学院に入学する前。

同じテーブルを囲んだメンバーは、ほとんどが他県の方で、大学の教授、附属高校の先生、教育委員会の方、中学校の先生・・・と、全く立場の違う方ばかりだった。最初にメンバー表の肩書きを見て、共通の話題があるのだろうか、話について行けるだろうか、と不安に思いながら席に着いた。

報告者の話を元に、意見交換が進んでいくと、「分かる」「あるある」と、同調する部分が出てきた。昼食時間も話が弾むほど和やかな雰囲気になった。話し合いを終えると、共通の認識をもった充実感が大きかった。校種や地域環境は違っても、大事だと考える点や必要だと考える事柄を共有できたことは、もっと学びたいという意欲につながった。

そんな良いイメージをもって、今回のラウンドテーブルに参加した。1週間の勤務を終えて迎える週末だったが、期待感が大きく、楽しみにして会場に向かった。

セッションIIでは、ZONE B 「教師」に参加した。

シンポジウムでは、文科省が取り組む課題や日本教育経営学会から示される校長の専門職基準についての意義等の話を受け、「子ども主体の風土をつくる」ことについての意見交換を聞いた。

その後のフォーラムでは、「福井県の風土は他県と違う」という、宮下先生の切り出しから、福井の風土についての話が中心となった。

他県から見ると、福井の良さを感じる点がたくさんあるという。私自身は福井しか知らないのですが、日頃のありのままの様子を語ると、そこに良さを見いだせるようである。職員同士での助け合いや学び合いができているように映るようである。また、福井

の教職大学院の良さについても確認された。ここ2年で全県に教職大学院ができるということで、富山大の新多先生は、大きな関心を示されていた。福井に教職大学院ができて、結構な年数が経つが、その効果が浸透し始めているというとらえ方もあった。とても恵まれた環境に自分がいることを実感した。是非、こうした学びを深めながら、自分自身と勤務校全体、強いては地域全体がレベルアップできるように努めていきたいと思った。

セッションIVでは、小グループで実践の展開を聞き合った。今回は、札幌大通高の実践や福大付属中の研究組織と研究の概要が紹介された。大通高は、渡日帰国生徒をはじめ、様々な背景をもつ生徒や、年齢や生い立ちがいろいろな人達を通う、地域に開かれた学校である。自己表現の場を確保することで、一人一人の自己有用観を高めようとする取り組みは、年々幅を広げ、壮大なプロジェクトであった。

附属中の報告では、長い歴史の積み重ねの上で、しっかりと形が整った研究組織や授業の展開、研究会などの実践が繰り返し広げられていると感じた。メンバーでいろいろな話をする中で、私自身が強く感じたのは、「子どもを見取る」というスタンスや意識が、附属中の先生方に浸透していることが大きく、それが根底にあることで、研究や日々の活動も上手く進んでいるということである。そして、このことは、大通高の実践を支える熱意ある先生方にも共通しているのよう感じた。また、自分の勤務校のような公立の小学校においても、教師自身が「子どもを見取る」という共通のスタンスをもつことが必要で、そうすることで、学校全体の教育効果は上がると感じた。全く立場の違う方々の話が、自分の勤務校も含めて、「つながった」と感じる、とても有意義な時間であった。

Zone A

福井市安居中学校 加藤 学

6月のラウンドテーブルは、学校現場としては非常に多忙な時期と重なり、参加することを迷うことが多い。しかし、毎回なんだかんだと言いながらもいつのまにか二日連日で参加することになっている。これは、ラウンドテーブルに参加することによって熱意ある多くの実践者と出会い、次の実践へのエネルギーを戴くことができるからであろう。今回も例にもれることなく多くの学びある2日間となった。

Session I のポスターセッションでは、東京都板橋区の赤塚第二中学校の発表を拝見した。今回の発表では、赤塚第二中学校というコミュニティの中で育まれている学校文化を、若手の先生方が語っている姿に感銘を受けた。教科センター方式の学校を立ち上げるにあたり核となる先生が中心となって創りあげたシステムや研究体制が、教師集団全体に広がり受け継がれていこうとしていると感じ、発表を聞きながら羨ましく思った。私が勤務する安居中学校でも負けずに学校文化を教師集団の中に根付かせていきたいと感じた。

Session II では、「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」をサブテーマに福井市豊小学校の発表、奈良女子大附属中等教育学校、そして安居中学校の実践の報告を聞いた。どの報告からも感じたことは、「ラウンド型の学び」が多くの学校現場で創意工夫されながら実践され、広がりを見せていることである。そして、これらの取り組みの先には、教師自身が学び合いながら集会的な知性を育てていく「専門職としての教師集団」があるように感じた。いくつもの課題が次々と生まれてくる現代社会では、子ども達とともに学び協働していくコミュニティによって変革に対応していくことが不可欠になってきている。今回報告された学校では、新しい挑戦を行っているがそこに所属している教師集団は多くの課題を抱えながらも、どこか楽しみながらそれらの問題に立ち向かっているように感じた。多くの学校現場で今回の報告のような実践が生まれていくことで、学校はより豊かな学びを育む場になるのではないかと感じた。

続く、session III でも session II での報告の熱気を引き継ぎ、小グループで実践を語り合った。グループ内では「ラウンド型の学びではその効果を高めていくためには、グルーピングが非常に重要である」

ということが話題に上がった。ラウンド型の学びをコーディネートするためには、「know-who（誰が何を知っているのか）」ということを理解し、意図的に人と人を出会わせることが重要である。誰と誰が出会うことにより新たな学びが生み出されるのかを想像しグルーピングを行うことで、不確定要素の多いラウンド型の学びをコーディネートしていくことが可能になる。知識社会の学校では、このような学びをコーディネートしていく力が求められていくことを再確認した。

余談ではあるが、Session I では、安居中学校での実践を生徒が自らポスターセッションで発表を行った。生徒が大人の会議であるラウンドテーブルで発表をするという取り組みは、ちょうど1年前の Summer Session から継続して行っている取り組みである。当初は、「生徒たちに学校内では体験できない経験を積ませたい」という思いや、「安居中学校で生徒たちが育っていることを実際に生徒を見ていただくことで紹介したい」という考えがあつての参加であった。しかし、回を重ねていくうちに、「子どもたちの学び合うコミュニティを育む」という意味合いが強くなっていった。今回ポスターセッションに臨むにあたり、子どもたちは既にラウンドテーブルを経験したことのある上級生と初めて参加する下級生と一緒にチームを組み発表の準備を行っていった。この準備の中で、子どもたちは安居中学校での実践をふり返り自分の言葉で語れるように、実践をもう一度意味づけ価値づけしていった。また、上級生とか下級生と一緒にチームを組み発表の準備に取り組むことで、開校当時の様々な重要なエピソードを物語として下級生へと語り伝えることができている。こういった営みを通して、子どもたちは学び合うコミュニティを学校の中に築いていくのだ。

そして、今回は、そういった子どもたちの取り組みに多くの教職員が関わり、子どもたちの発表を支えることができた。ラウンドテーブルへの参加は、今までは生徒会の活動の一環としか位置づけされていなかったことを考えると多くの教職員が子どもたちの活動に携わったことは、安居中学校にとって大きな一歩であったと言える。ラウンドテーブルの存在は、安居中学校の生徒と教師が共に学び合い成長していくために、今や欠かせないものとなった。

Zone B

奈良女子大学教育システム研究開発センター 特任助教 盧 珠妍

6月27日(土)、28日(日)の二日間、福井大学教職大学院主催の「実践し省察するコミュニティ」というテーマを掲げた「実践研究 福井ラウンドテーブル」に、今回初めて参加することになった。

四つのZoneのうち、私はZone B「21世紀の教師教育をイノベーションする—「チーム学校」を支える教師教育～教職大学院の成果を問う～」を選び参加した。

ますます国際競争が激化していく一方で、日本の教育界ではいま、大学入試の抜本改革が中教審から答申され、また指導要領改訂の時期を目前とするなど、学校教育に大きな地殻変動が起ころうとしている。そんな中で、学校教育において教職員の力をどのように発揮していけばよいか重要なキーとなることは間違いない。

まず私の興味を引いたのは、Zone Bのサブテーマである「「チーム学校」を支える教師教育」のために、行政、学校、教職大学院、地域が各々どのような組織をつくり、それぞれがいかにして関わりながら「オートポイエシス」的なシステムを構築してきたのかということである。それにまつわる話は、「セッションⅢフォーラム」で聴くことができた。自分たちのグループでは、コーディネーターである福井大学教職大学院の先生をはじめ、同大学院生の現職教諭、福井大学附属小学校副校長、福井県教育庁教育総務課長、それと県外からは富山大学教職大学院教員と、様々な立場の方々と有意義な議論を交わすことができ、その中で福井大学教職大学院が教職大学

院としてどのようなシステムを目指してきたか、そしてこれから目指していくのかを聴けたのは貴重なことであった。

その有意義な経験とともに今回、私はある得難い体験をした。一つのテーブルを囲んで進行されたフォーラムの議論における「不思議な衝撃」の感覚はいまも鮮明に覚えている。その秘密は「ラウンドテーブル」という形態に隠されているようだ。ゼミでも勉強会でも(大小や段階の違いはあっても)、異なる分野、地位、立場の人たちの囲んだ一つのテーブルは、穏やかに、それでいて熱く意見を交わし議論できる場となり、互いに正面から向き合うことができる空間・時間となる。さらに、相互に刺激し合い、支え合い、それにより関係性自体が変容していくことが実感できるのである。縦横無尽に、柔軟に融合し、自己変容を遂げる生きたシステム(=「オートポイエシス」システム)としての「福井ラウンドテーブル」は、別の言い方をすれば理論(思想)と実践が一つの有機体のごとく、自律的に動いているとも言えるのではないかと強く印象づけられた次第である。

今回、あらためて行政、学校、大学、地域の連携のあり方、特にその中でも大学の役割について、また組織をなす人々との向き合い方、つまり「他者との連携」のあり方の理論的な形態とは何かについて考えさせられた意義深い時間であった。

Zone C

福井市酒生公民館 竹嶋 純子

今回のシンポジウムは「多文化社会を支える」というテーマで、外国籍の子どもたちをサポートしている日本語指導ボランティアの現状と、外国語大学の先生から見た多文化共生のお話とのこと。今考えると大変失礼な話なのですが、アパートやマンションがひとつも無い、のどかな田園地帯の我が地区には全く関係ない話…とっていました。ところがシンポジウムが進むにつれ話に引き込まれていく自分

が！まさに〈見ること・省みること〉これだからラウンドテーブルはやめられないのです。

昨年、ある事業をきっかけに、子どもたちが頻繁に公民館に出入りするようになりました。子どもながらも、学校では社会の一員として頑張っているのでしょう。1対1で正面からぶつかってくる子どもたちは、公民館では解放されるのか、自由奔放にふるまっていました。顔なじみの地区の子どもたちさえ関われば関わるほど、どのように接し、どのよう

に向き合えばいいのか悩みは尽きませんでした。ましてやそれが外国籍の子どもたちとなると、言葉の壁はもちろんその大変さは計り知れません。運営会議では、「聞いてほしい」「話したい」と、張りつめた気持ちを抱えた子どもたちからの「声」を聴き、ボランティア一人で抱え込むのではなく、全員が共有するという、ボランティア側をサポートする体制もしっかりととなされているからこそ、安心して子どもたちを見守り、支え続けていけるのだと感じました。

公民館主事になり 6 年目。わけがわからないながらも、一粒一粒、願いを込めて蒔いた種が、あちらこちらから芽を出し始めました。しかし、せっかく出た芽をどう育てていくか、またどう増やしていくか。成長と共に、課題も変化していきます。評価や結果を気にして前に進めず足踏みしていた自分の胸に、今回のシンポジウムの言葉が「がつん」と響きました。ユーモアを交えながら話された神吉先生。ラベルで見ないということ、まさに今回の私です。まわりをよく見ないうちから勝手に判断してしまうのではなく、まずは現場に足を運び、見て、聞くこ

と。どうしたら喜んで飛びついてくるか。よく知らない人にわかりやすく伝えるためにはどうしたら良いか。ふれあいの場・息抜きの場を設ける（居場所作り）。課題を洗い出す（話し合い・聞き合う場）。そして圧勝でなくてもいい勝ち続けること。どの言葉もすべて公民館活動の原点につながっていました。

コミュニケーション能力とは、聞き上手なことと先生はおっしゃいます。クロスセッションでファシリテーターの大役を仰せつかったものの、今回もまた、参加者のみなさんに助けられました。違った場所で活動している報告者同士が、同じような悩みにぶつかっていたり、シンポジウムでの言葉が解決のヒントになったり。どんどん話が膨らんでいくのもラウンドテーブルの面白いところです。報告者の話を引き出すどころか、足踏みしていた自分が、逆に背中を押していただいたような気がしました。

今回、多文化社会を支えるという視点から、改めて公民館を省みる機会をいただけたことと、今回の開催にご尽力いただいた皆さまに感謝いたします。

Zone D

福井市至民中学校 永廣 裕子

「当時は、とても楽しい内容の実験で、おもしろいと思ってやっていたのかもしれない。でも、高校の理科の授業で公式を習ったときに、“確か金属の表面積が大きくなるようにすればよかったな”と、中学校の時の実験結果を思い出し、公式を本当に理解することができた。これは、授業で先生から習うだけでなく、実際に自分たちで失敗を繰り返しながら何回も実験したおかげで、公式までの思考につながったのだと思う。また、中学校では、いろいろな意見を聞いて、それを自分でどう処理して自分の考えにしていくかや、人とのコミュニケーションの取り方も学ぶことができた。」

これは、福井大学附属中学校に赴任して協働探究型の授業に取り組み始めた当時の生徒がその頃を振り返り語ってくれた言葉である。この時、知識を習得することだけを考えた教師主導の授業をしていたら、このようには語らなかったであろう。

今年度、新任校で「なぜマグネシウムは二酸化炭素の中で燃えるのか。」というテーマのもと、協働で探究していく授業に挑戦した。これまでの経験や既習事項と生徒の思考が繋がらず、課題の残るもの

となった。しかし、授業を終えるたびに、教卓の周りに来て、「今日の授業、楽しかった!」「何でそうなるの?分からんわあ!」という声が聞こえるようになった。また、生活ノートに理科の授業について綴ってくる生徒も増えていった。この「楽しかった!」は、ただ実験が楽しいからではない。仲間とともに考えを出し合い疑問を解決する過程において、自分の気がつかなかった考えを知ったり、自分の考えをさらに深めたりすることが楽しいのである。どの生徒も、「わかりたい」、「学びたい」と思っている。知識を習得するのも大切であるが、そこからさらに教師が一工夫し協働で学びあう探究型の授業をすることで、学びが広がったり深まったりする。さらには、将来生徒が何か問題に直面したときに、それを解決する手がかりや術を見つけ、自分自身で乗り越えていくのに役立つ力が育めると考える。

今回、これまでの自分の授業実践を省察し、再構成したものをシンポジウムで発表したことによって、「教師として教えたいこと」、「教科としてつけたい力」と「子どもたちの問い」を一致させたり、意欲が持続するような教材を探したり、探究過程のカリ

キュラムを考えたり、生徒の考えを見取りそれを授業に生かしたりするには、教師のデザイン力が必要であると改めて感じた。同じ状況、同じ教室、同じ子どもはどこにもなく、授業も同じ授業は存在しない。よって私たち教師も、常にそのときその場にい

る子どもに向き合いながら実践していくことが大切である。現代社会を強く生き抜く子どもを育てることを忘れず、「今、目の前にいるこの子にとって何が必要なのか、今何をすべきか」を考えながら、今後も協働探究型の授業に挑戦していきたい。

※ご所属は当時のものです。

福井大学基金にもとづく
福井大学教職大学院
次世代教育創成資金

明日の学校をつくる協働の実践と探究を支えるために
明日の教師の学びを支えるために

次世代教育創成資金に
ぜひご協力ください。



詳細はパンフレットにてご確認ください。

教職大学院 Newsletter **No.123**

2019.6.21 発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院

福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp
